

# 寄稿2

## 私たちのフィールドワーク

### 南茅部の活性化を提案

北海道教育大学函館校 国際地域学科

木村 瞳子(きむら とうこ)

猪狩 真央(いがり まお)

鳥倉 靖世(とりくら やすよ)

#### 1 はじめに

北海道教育大学函館校では、「国際地域学科」の名の通り、大学と地域が連携した取り組みを多数行っています。私たちが南茅部地域で行った地域滞在型インターンシップは、カリキュラム上では「地域づくり支援実習」と呼ばれるものであり、この実習は、学生にとって生まれたり育ったりというような普段馴染みのない地域に一定期間（原則として10日間以上かつ90時間以上）滞在して、地域が抱える課題に関する就業体験を行うことによって当該地域の振興に必要な実践的能力を育成する地域滞在型インターンシップで、正課の授業であることも特徴の一つです。

私たちは、2022年8月から9月にかけて南茅部地域に2週間滞在し、函館市南茅部支所をはじめ宿泊施設など15事業者、延べ90人の地元の皆さんの協力を得てフィールドワークを実施しました。

#### 2 南茅部地域の概要

函館市南茅部地域は、2004年に函館市と合併した旧茅部郡南茅部町の地域です。古くから天然昆布の生産地として知られる港町で、1955年の人口のピーク時には16,478人でしたが、現在では4,500人あまりまで減少が続いています。65歳以上の高齢者の割合も函館市全体の36.6%より高い44.3%となっています。人口の減少・高齢化に伴い、少子化も進み、地域内には4つの廃校があります。

南茅部地域の主な産業は、昆布漁を中心とする漁業であり、地域の就業者数の約半分を占めています。南茅部地域で生産される昆布は、かつて松前藩が朝廷や将軍家に献上したことから「献上昆布」とも呼ばれ、南茅部地域を支える重要な生産物です。生産された昆布は主に関西地方に向け出荷され、旅館や飲食店などで提供されています。地域内には、加工センターや直販所もあり、昆布の生産から加工、出荷、販売がすべて地域内で行われています。

さらに、南茅部地域には2021年7月27日に世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成遺跡である、大船遺跡・垣ノ島遺跡があります。また、垣ノ島遺跡に隣接して、函館市縄文文化交流センターがあり、北海道唯一の国宝である「中空土偶」や、縄文遺跡群から発掘された遺物を展示しています。中空土偶をモチーフとした「カックウ」というキャラクターは、縄文遺跡群のPRなどさまざまな場所で南茅部地域の広報に使用されており、函館市内で多く見かけることができます。



写真1 (左から) 鳥倉さん、猪狩さん、木村さん

#### 3 実習内容と気づき

実習では、養殖昆布作業体験や仕出し屋や喫茶店などの飲食店、宿泊施設、食品加工施設から直販所などさまざまな仕事を体験しました。

まず、養殖昆布作業体験では、朝3時に漁師さんの

ところに行って、実際の作業を見学させていただきました。昆布作業の流れについての説明を受けた後、昆布をのす（伸ばす）作業や昆布の葉を切る作業を体験しました。

また、昆布作業2日目には漁師さんの船に乗せていただき、朝日に照らされて輝く山々や海の美しさに感動しました。しかし、それらは地域の方にとっては日常であるため、特別なことだとは感じていないようで、魅力とはつくるものではなくて、気づくものなのだと感じました。そして、魅力的だと感じる人につなげることが重要だと思いました。漁業体験をさせていただくなかで、漁師さんの「昆布がなくなったら南茅部地域が地図から消えてしまう」という言葉が印象に残りました。

仕出し屋では中空土偶弁当の手伝いをさせていただき、中空土偶の顔に見立てたごはんを盛り付ける作業をしました。飲食店では調理や掃除、接客などを体験しました。お客さんがいない時間には地域の方とさまざまなお話をしました。飲食店を営んでいる方も昆布漁が忙しくなる夏には、朝の2時から6時くらいまで作業を手伝っているようで、昆布作業の大変さなどを教えていただき、南茅部地域の漁業は町の人全体で支えられているのと感じました。

また、お店を継ぐ人がいないから店をたたむ可能性が高いとおっしゃっている方もいました。店を継ぐ人がいなくても、従業員の皆さんが築き上げてきた地域の人やお客さんとのつながりを若い世代が引き継いでいけたらよいと思いました。そのためには、世代間交流が鍵になると感じました。

SNSを活用しているお店も多く、今ではSNSでの投稿を見て来てくれるお客さんも多いそうです。投稿には南茅部の海や山の写真なども載っていて、南茅部地域にも興味を持ってもらえるのではないかと感じました。このように、一人ひとりが小さなアクションを起こすことが大事だと感じました。今後も他の地域の飲食店に頼らず、地域内でお金を循環させることができ

ればよいと考えました。

この他にも、昆布の直販所や食品加工施設では、在庫の商品にシールを貼ったり、梱包したりしました。漁師さん達が一生懸命採った昆布が加工される過程を見ることができました。さらに、世界遺産を構成する大船遺跡や垣ノ島遺跡では、世界遺産や国宝を見に来た人がそれだけで終わらず、南茅部や漁業に興味をもつようにつなげる何かがあれば、観光客と地域の人、双方にとってプラスになると感じました。

実習最終日に、支所で課題整理・発表を行いました。実習で見つけた課題をホワイトボードにまとめるなかで自分たちが多くを学んだことに気づきました。また、今回の実習が多くの方の協力があったことができた実習であったと感じました。



写真2 昆布作業の様子

#### 4 地域の課題

実習での体験や気づきを踏まえ、私たちが考えた南茅部地域の課題は以下の通りです。

まず、漁業については、「昆布を保管する倉庫の不足」、「繁忙期の人手不足」の2つがあげられます。水揚げされた昆布は乾燥後、倉庫に保管されますが、大量の昆布を保管するためには倉庫が複数必要で、見学させていただいた漁家では5箇所所有しているそうです。しかし、倉庫を管理する労力・金銭面での負担は大きく、倉庫を持つことのできない漁家もあるそうです。

南茅部地域の漁師さんは基本家族で作業を行っていますが、昆布の水揚げが行われる6月下旬～8月上旬になると、前述の通り飲食店の方など地域内の人が作業を手伝っています。しかし、真夜中から早朝にかけて行われる昆布作業は体に多くの負担をかけ、地域内には高齢の方が非常に多いため、いずれ人手不足になることが想定されます。

地域内の高齢化に伴い、漁業と飲食店に共通してあげられる課題として、「後継者不足」があげられます。地域の多くの飲食店は60代以上の高齢の方が経営しており、店を継ぐ人がいないと話される方も多くいらっしゃいました。このままでは、近い将来に、縄文遺跡群を目当てに観光しに来たとしても、飲食できる場所がなく、観光客が南茅部地域の近隣町や函館市内中心部に流れてしまうことが考えられます。

また、縄文遺跡群、道の駅など観光面での課題は以下の通りです。

まず1つ目に、「外国人対応・体験型要素の不足」です。遺跡が一般に公開されたのが世界遺産登録と同じタイミングだったこともあり、さまざまな観光客向けの整備がまだ完全ではないことがわかりました。

2つ目に、道の駅の「休憩・飲食機能の不足」です。一般的に道の駅の機能として「休憩・飲食・買い物」があげられますが、南茅部地域の道の駅には休憩・飲食のための椅子やテーブルはなく、提供される飲食物もソフトクリームのみでした。「道の駅」自体が観光の一つのコンテンツともなっている昨今の流れにはそぐわず、南茅部地域の周りにはバイパスが整備されているため、休憩・飲食を求める観光客が近隣の鹿部町などに流れてしまうことが想定されます。

## 5 南茅部の活性化に向けて

私たちは2週間の実習を通して得た気づきから、大きく分けて3つの提案をします。

まず、「世界遺産登録の特需があるうちに、早めの対策を打つこと」です。私たちは実際に2つの遺跡を

訪ねて、「遺跡自体の寂しさ」を感じました。普段縄文文化に触れる機会が少ない私たちにとって、発掘調査などの体験は純粹に楽しいと感じた一方で、遺跡には復元物がないため、案内板のみで遺跡を見学すると観光客の視点では物足りないと感じる人もいたと思いました。私たちが遺跡を見学する上で何が楽しいのか考えたときに、「その当時、ここで暮らしていた人がどんな考えを持って、どんな生活をしていたのかについて思いを巡らすこと」が一つとしてあげられると思います。現在、バーチャル空間で当時の再現された様子を見ることができ工夫もされていますが、その遺跡を訪れる人にとっては「実際にその目で見る」方が楽しいと感じるのではないのでしょうか。そういった「遺跡の状態を保ちながら見る人が目や手で実際に体験できるか」という点はこれからも考えるべき課題であると同時に、それらの対策を「祝・世界遺産登録」というタイムリーな話題が生きている間に、改善することが重要であると感じました。

また、同じく早めの対策が必要だと考えたのが、「観光モデルコースの造成」についてでした。実習を通して、各訪問先それぞれがとても魅力があることはわかったのですが、実際に自分たちが南茅部に観光として行く場合、どのような交通手段で、どこで食事をとって、どこを観光すればいいのか悩んでしまうという課題があると考えました。そのため、「遺跡を見る→地域の飲食店で食事をとる→直販所でお土産を買う→宿泊」といったモデルコースを一つでも造成することで、観光してみたいと思う人が増加すると考えました。現在、南茅部では「味の散歩道」という地域の飲食店と宿泊施設が協働して、日帰り観光客向けに、入浴と食事がセットで安価に提供されるサービスを行っています。この取り組みを活かして、飲食店と宿泊施設のみにとどまらず、遺跡や直販所も巻き込んだ包括的な取り組みを行うことができました。

そして最後に私たちが一番強く述べたいのが、「若者の参画の必要性」についてです。今回の実習の目的

は、私たち大学生が地域に入り込んで課題・魅力を見つけることでしたが、こういった外の間人が南茅部を見つめるという活動をさらに進めていくべきだと考えます。なぜなら、「外の間人が魅力を再発見することで、内の間人が新たな魅力を再確認できるというよいサイクルが生まれる」「地域の間人が地域について見つめ直すきっかけになる」などの効果があるからです。少子高齢化によって南茅部の若者が少なくなっているなか、一時的でも若者が地域の活動に参加できるような取り組みをつくることは地域活性化において重要であると考えました。



写真3 仕出し屋での作業の様子

## 6 おわりに

函館市内で大学に通う私たちは、実習まで南茅部地域に足を運んだことはありませんでした。しかし、南茅部地域での2週間の実習を通して、南茅部地域の魅力を数多く感じる事ができました。そして、その魅力は地域の間人たちが既に知っているものであった場合もあれば、そうでない場合もありました。また、その逆で、地域の間人たちがあまり考えていなかった地域課題も見つけられることができ、それを指摘することができました。「観光客」ではなく、滞在するからこそ得られた学びが非常に多かったと感じています。

実際に地域に滞在し、就労体験をしながら地域課題に向き合うことは、学生自身の実践的行動力を養うことができるとともに、地域の間人も地域を見つめ直す

きっかけになるのではないかと感じました。私たち学生は、「地域おこし協力隊」のようなプロではありません。大学の先生方や地元の行政の皆さんのような経験もなく、知識が乏しいと自覚する場面も実習中は多々ありました。しかし、そんな「学生」が地域内で動くからこそ、地域の間さんは手助けをしてくださり、たくさんお話を聞かせてくださいました。さらに、飲食店に来たお客さんに、南茅部地域が実習で学生を受け入れていることを新聞やニュースで知ったと声をかけていただけることも多くありました。このような、学生が地域に入ることによって生まれる地域の間人の関心こそが、この実習の意義ではないかと考えます。

「まちおこし」は、特定の少人数のみがきっかけをつくり、実行する印象がありましたが、そうではなく、地域の間人すべてが関わり合い、人の輪を広げていくものだと感じました。また、私たち学生のように、どんな立場であっても地域づくりに関わられることを、今回の実習では実感することができました。意見を伝え、共有し、実際に行動することで、大学内で学ぶだけでは得られない社会・地域と接点を持つ大切さに気づくことができました。

私たちは、短い期間でしたが、地域の課題に向き合っており、地元の皆さんと共に話し合い、解決策を探ることができました。南茅部地域は、世界遺産登録をきっかけにこれから注目を集めていく地域だと思います。10年後、20年後にも地域が存続していくために、私たちにできることを考えていこうと思います。私たち学生が、成果として地域に還元できるものは微々たるものかもしれませんが、今回の実習が、私たちと関わってくださった皆さんが自身の生きる地域のことを見つめ直すきっかけになっていけば、これほどうれしいことはありません。

最後に、函館市南茅部支所をはじめとした、実習に協力くださったすべての皆さんに感謝申し上げます。